

# 第V章 総括

梅北針谷遺跡の発掘調査では、縄文時代・弥生時代・古代・中世の遺構・遺物が確認された。そこで、最終章である本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとにそれぞれの時代の様相について若干の考察を加え遺跡の位置付けを行いたい。

## 1 縄文時代

時期は土器編年から後期中葉から突帯文期に相当すると考えられる。

本遺跡では遺物は出土したものの、遺構を検出することはできなかった。九州では後期後葉から晩期中葉の集落は密集して切り合う竪穴建物が多数検出されていることから（水ノ江2002）、標高150m前後の本遺跡の台地に密集した集落が存在した可能性が十分にあり、時期不明としたピットの中には当該期の掘立柱建物跡として存在した可能性も考えられる。

## 2 古代・中世

今回の調査で確認された遺構と遺物は、古代から中世の時期幅に収まる。

試掘調査による土師器や須恵器の出土状況から古代の生活痕跡の検出が予想できたが、結果として、古代を中心とする掘立柱建物跡をはじめ焼土土坑を11基検出することが出来た。また、多くの焼土土坑からは、鍛冶作業時に使用又は廃棄されたと考えられる鉄滓や羽口片などの鍛冶関連遺物が数多く出土した。

掘立柱建物跡について着目すべき点は、古代の掘立柱建物跡SB1に焼土土坑が共存しているということである。その他、SB2・SB3・SB4が3軒あるが、土坑や遺物は確認できなかった。ただし、全て、東西棟の方位を向くことから同一時期の区画あるいは方位に規制を受けた遺構だと考えられる。

SB1の柱穴跡からの出土遺物は土師器の細片が最も多く、遺構埋土からは土師器片、土製品、須恵器片、鉄製品、鍛冶関連遺物が多数出土した。時期は8世紀後半から11世紀にかけての遺物が出土している。また、SB1内で検出された焼土土坑については、土坑内から出土したイネの年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲は、1号焼土のイネが7世紀末～9世紀後半、2号焼土のイネが8世紀前半～9世紀後半、3号焼土のイネが7世紀後半～9世紀中ごろという分析結果を得た。

遺構から出土した土器の年代も同一時期の遺物が出土していることから矛盾しない。また、焼土土坑跡から検出された樹種は量としてクリが最も多く、樹種同定をかけた全ての焼土土坑から検出された。その他の樹種はわずかに混入している程度であった。クリは、耐朽性・耐湿性に優れ、保存性も高い樹種である。こうした木材としてのクリの特徴やすべての焼土土坑から検出されているという結果から、鍛冶炉の燃料材の主材として使用された可能性が高い。

一方で、その他の樹種として検出されたウコギ属、ネジキ、ムラサキシキブ属などは小径低木に該当するため燃料材としてはもちが悪く、有用な燃料材とは言い難い。したがって、焚き付け材の可能性を検討することが可能である。こうした樹種同定の結果を踏まえると、火をおこし何らかの作業で火を使った事実は間違いないと考えられ、鍛冶炉としての機能が示唆される。それぞれの焼土土坑に時期差はあるものの7世紀末～9世紀後半の時期幅に収まることがわかった。したがって、焼土土坑と掘立柱建物跡は同一時期に存在し、屋内作業の鍛冶炉として機能していたと考えられる。

次に、金属分析の結果から遺構の性格について検討していきたい。焼土土坑は全部で11基検出して

るが、分析については、掘立柱建物内で検出した鍛冶炉について分析を行った。分析結果は、図のとおりである。

金属分析による化学成分の分析によって焼土土坑の椀型滓片、鍛造剥片・粒状滓からは、砂鉄を原料とする精錬鍛冶と鍛錬鍛冶が行われていたということが明らかとなった。また、分析をかけた全ての遺構にいえることは同一の炉で精錬・鍛錬の鍛冶が行われているということである。近世に入ると精錬鍛冶は大鍛冶と呼ばれる作業に相当し、鍛錬鍛冶は小鍛冶と呼ばれる作業となり、それぞれ独立して作業を行っていく。古代の鍛冶工程の操業については、鍛冶場の性質・役割によっても操業の仕方が異なってくると思うが、実際の操業スタイルについて明らかになっていない点が多い。しかし、いずれにしても精錬から鍛錬までを一連の工程として作業を行っていたということは、それだけの技術をもっていたということであり、鉄器生産がある程度組織的に行われていたと窺い知ることができる。このことは、2号焼土から出土した羽口からも検証できる。分析にかけた羽口は、耐火度分析を行った結果、推算耐火度1418℃で、意図的に高耐火度の胎土を用いて羽口を作ったものと考えられる。古墳時代に見られる高坏転用羽口とは明らかに異なり、公的機関を通して各地に新しい鍛冶技術が伝えられ定着した結果であると同時に、鍛冶の普及が国家事業の一環として行われていたことを示唆しているものとする。よって、本遺跡には高度な技術をもった鍛冶職人の存在があり、精錬・鍛冶工房が付属したと考えるのが妥当である。

次に遺跡の性格を検討したい。本遺跡は、さまざまな遺物が出土している。土師器の坏を中心とした食器や土師器の甕など貯蔵を目的とした日常生活に必要な不可欠なものである。その一方で、墨書土器、布痕土器、硯など官営施設の関連を伺わせる遺物も存在する。

特に、大量の布痕土器片は着目され、破片数は808点を数える。遺跡は海から遠く離れた内陸であり、塩生産が行われた可能性は皆無に等しい。可能性としては、内陸地であるが故に塩の流通の拠点としての可能性が考えられる。

また、別な視点で検討していくと鍛冶操業において、混和剤としての塩の活用が考えられる。鍛冶操業は高温での操業が必須であり、本遺跡の炉壁、粘土塊、羽口の耐火性を高めるつなぎとしてスサや塩を混ぜた混和剤が必要となる。遺物として出土した炉壁や羽口、埋土から出土した焼土塊等にスサ等の混和剤が確認されたことから塩も大量に使用されたのではないかと考えられる。

こうした点を踏まえて本遺跡の性格を検討すると、布痕土器（製塩土器）が流通していく上で、基幹物資の生産流通等を兼ね備えた労働拠点としての側面を備えていたと想定することも可能であり、律令社会と密接な関わりが想起される古代遺跡として着目することが可能であると考える。

また、同時期の本遺跡と関連する遺跡として、鹿児島県の高篠遺跡があげられる。高篠遺跡は、9世紀代の短期間に営まれた遺跡である。本遺跡と時期が重なるうえ、掘立柱建物内に鍛冶炉が設置される屋内型の炉が形成されるなど、本遺跡と同じ性格をもつ。また、高篠遺跡は、鍛冶炉の地下構造で軽石の石組みを伴う遺構も確認されている。本遺跡は集石としての検討はしなかったが、11号焼土の鍛冶炉からは、軽石を羽口台として使用した痕跡があり、その他の出土軽石からも、火を受けて赤化した軽石や粘土が付着した軽石が出土するなど羽口台や側壁などとして鍛冶炉を構築したと考えられる遺物が出土した。その他にも、多量の布痕土器、墨書土器等の遺物も出土した。

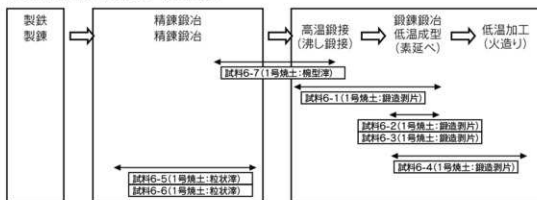
続いて同じ都城市内には、横市川流域の星原遺跡の調査成果が目玉である。9世紀後半から10世紀前半の遺構・遺物が確認されており、遺構は掘立柱建物跡、畝状遺構、道路状遺構が確認され、遺物には、硯・墨書土器、鉄製品（刀子・絞具等）、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓）が確認されている。鍛冶炉は検出されていないが、出土遺物の様相から鍛冶遺構があったことは間違いないと考える。

以上のような関連性からこの2遺跡と本遺跡を地図上で確認し、基幹物資の生産流通・各種経済活動を行うことが可能であるのかという点で検討を行いたい。本遺跡と高篠遺跡は直線距離にして約10km、星原遺跡は約5kmである。都城-国分を結ぶ古代交通路に関しては明らかにはなっていないものの、宮崎自動車道都城インターチェンジ西側に位置する並木添遺跡で、平安時代の道路上遺構が検出され、約420mにわたり直線的に走行することから、広域的な道路であると想定されている。また、その並木添遺跡の南西約3kmには、9世紀後半から10世紀前半（平安時代前期）における大型の掘立柱建物跡などの存在から地元有力層の邸宅跡とされる大島富田遺跡があり、南側約4kmには「延喜式」に記載された島津駅の比定地とされる祝吉御所が郡元町にある。この祝吉御所を古代島津駅と想定し、鹿児島の大隅国府推定地までを川伝い（横市川）を官道と仮定してルートをとると、島津駅と大隅国府の間に高篠遺跡を見ることができ、また、星原遺跡もこのルート伝いに立地する。そして、本遺跡も梅北川・大淀川と川伝いに北上すると島津駅につながる。一つの仮定としての検証になるが、3遺跡の交流が成立可能となる。

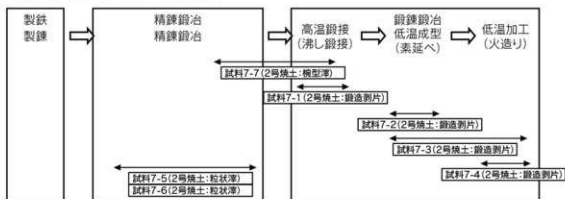
時代は下るが近世に編纂された庄内地理志によると梅北の地場産業として細物道具（細身の太刀）が紹介されている。また、益貫城（現在の梅北城跡）の周辺より「鍛冶鉄を焼く際に用いられる焼刃土が上品（上質）也」という記録が見える。直接、古代・中世の梅北と結びつくことにはならないが、古代の時期に行われた鍛冶作業が代々受け継がれ、後世へと受け継がれたと仮定することができる資料の一つとして検討することも可能であると考えられる。

今回の調査によって古代の鍛冶炉が複数発見されたことは、今後の都城市域の様相を考える上で意味深いと考えられる。都城市には大島富田遺跡のように「地域の有力者」あるいは「何らかの公的機関」と想定されている遺跡がいくつかあるが、それらとの相違をどのように考えていくのか。また、同時期の遺構・遺物が出土している鹿児島県の高篠遺跡のような「公的機関」としての性格をもつ遺跡と拠点施設を介しながら鍛冶工業が発展し、鉄器の需要が拡大浸透し消費されたとするならば、それは、9世紀後半において、遺跡が増大することともつながり、その中において、流通経路や交通路の整備と地域のネットワークにもつながっているのかもしれない。今後検討していくべき課題である。また、都城市周辺の鍛冶遺構の認められる遺跡の分布調査、詳細な遺構の分析や分類の確立等についても検討を要する。

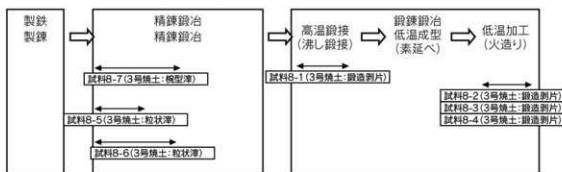
1号焼土鉄生産工程の流れ：(砂鉄起因)



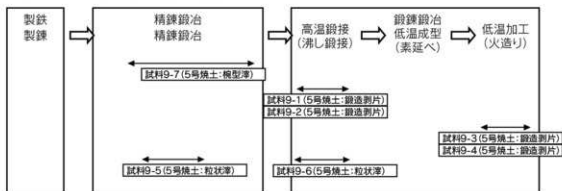
2号焼土鉄生産工程の流れ：(砂鉄起因)



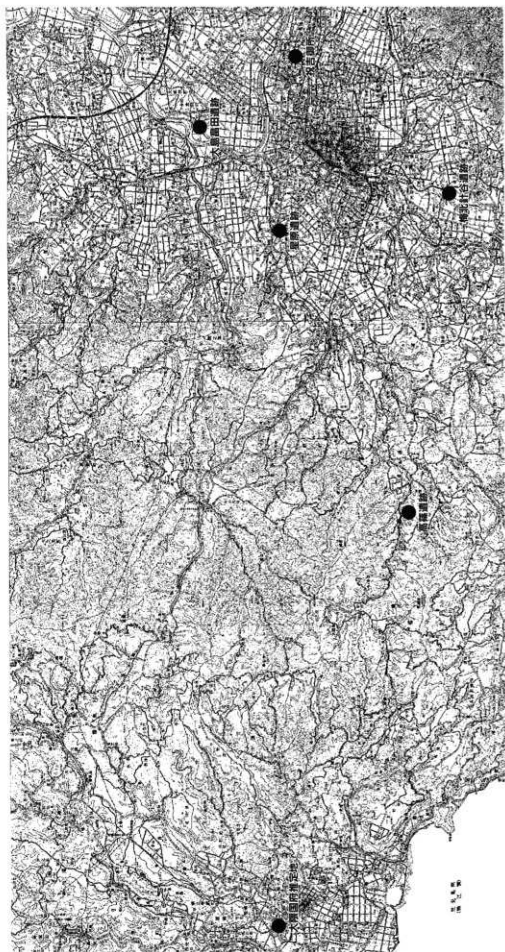
3号焼土鉄生産工程の流れ：(砂鉄起因)



5号焼土鉄生産工程の流れ：(砂鉄起因)



第44図 遺構別鉄生産工程の流れ (1号焼土、2号焼土、3号焼土、5号焼土)

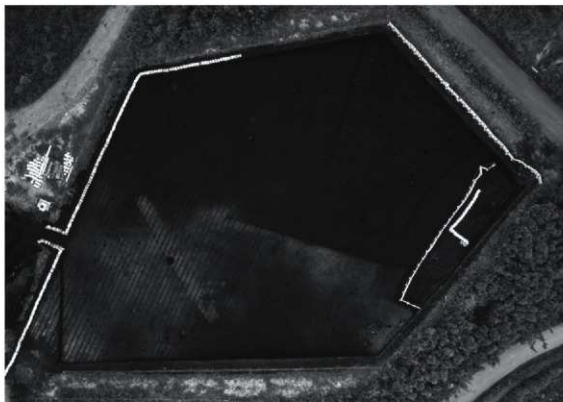


第44図 都城一國分を結ぶ古代交通ルート (S = 1/100,000)

〔参考文献〕

- 栃木県教育委員会 1998 『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』 栃木県埋蔵文化財報告書 第214集  
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2004 『九我河遺跡・跡場遺跡・高藤遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 第71集  
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2005 『大島遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 第80集  
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2007 『特林松遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 第120集  
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2008 『上水流遺跡2』 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 第121集  
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2004 『研究紀要・年報 縄文の森から』 第2号  
 島根県埋蔵文化財センター 2009 『大志戸Ⅱ鉾跡：遺構編・鉄関連遺物編』 島根県埋蔵文化財センター報告書 第17集  
 沖縄県埋蔵文化財センター 2007 『沖縄縄文研究5』  
 長崎県大瀬戸町教育委員会 1980 『大瀬戸町石罫製作所遺跡』 長崎県大瀬戸町文化財調査報告書 第1集  
 那城市教育委員会 1991 『大岩田村ノ前遺跡』 那城市文化財報告書 第14集  
 那城市教育委員会 1993 『並木添遺跡』 那城市文化財調査報告書 第24集  
 那城市教育委員会 1993 『油田遺跡』 那城市文化財調査報告書 第25集  
 那城市教育委員会 1994 『上ノ岡第2遺跡』 那城市文化財調査報告書 第27集  
 那城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』 那城市文化財調査報告書 第28集  
 那城市教育委員会 2000 『横市地区遺跡群』 那城市文化財調査報告書 第50集  
 那城市教育委員会 2004 『馬渡遺跡』 那城市文化財調査報告書 第62集  
 那城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡 坂元B遺跡』 那城市文化財調査報告書 第71集  
 那城市教育委員会 2006 『星原遺跡』 那城市文化財調査報告書 第72集  
 桑畑光博 1989 『東南部九州におけるある縄文土器の形式組別  
 - 中岳Ⅱ式土器の再検討 -』 鹿児島県考古23号  
 桑畑光博 2006 『大河』 『東南部九州における縄文から弥生への土器変換』 第8号  
 堂込秀人 1997 『鹿児島考古』 『南九州縄文晩期土器の再検討-入佐式と黒川式の継分-』 第31号  
 藤尾慎一郎 1993 『鹿児島考古』 『南九州の安帯文土器』 第27号  
 六一書房 1998 『貿易陶磁器研究 NO.1-NO.5』 日本貿易陶磁器研究会  
 日本中世土器研究会 1991 『中世土器の基礎研究Ⅶ』  
 日本中世土器研究会 1994 『中世土器の基礎研究Ⅹ』  
 真陽社 2004 『概説 中近の土器・陶磁器』 中世土器研究会編  
 奈良文化財研究所 2003 『古代官衙・集落と墨書土器』 -墨書土器の機能と性格をめぐって-  
 角川書店 1975 『古代の日本』 3九州  
 宮崎県佐土原町教育委員会 1996 『下村壱跡群報告書』 佐土原町文化財調査報告書 第10集  
 青木書店 1984 『土器製場の研究』 近藤義郎  
 青木書店 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』 村上 恭通  
 南九州文化研究会 2009 『南九州文化』 第109号  
 宮崎県総合博物館 『日向の山村生産用具』 宮崎県総合博物館 資料編6  
 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ』 宮崎県立埋蔵文化財センター報告書 第79集  
 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『筆無遺跡』 宮崎県立埋蔵文化財センター報告書 第166集  
 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『大島島田遺跡』 宮崎県立埋蔵文化財センター報告書 第178集

# 圖 版

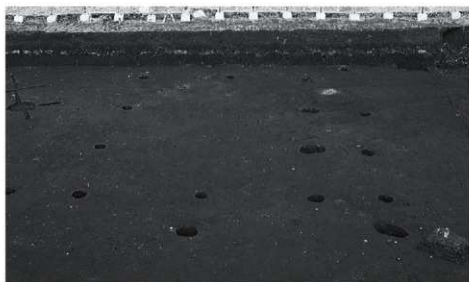


調査区全景の垂直写真（右側が北）



SB1及び焼土土坑完掘状況（右側が北）





1号掘立柱建物柱建物跡完掘状况



4号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡完掘状况



3号掘立柱建物柱跡完掘状况



1号焼土土坑遺物出土状況



2号焼土土坑断面



3号焼土土坑横切状況



3号焼土土坑断面



3号焼土土坑断面観察



3号焼土土坑完掘状況 北東から



4号焼土土坑断面 東から



4号焼土土坑遺物出土状況



4号焼土土坑完掘状況



5号焼土土坑断面 南から



6号焼土土坑検出状況



6号焼土土坑断面 南から



6号焼土土坑完掘 南から



7号焼土土坑断面 南から



7号焼土土坑完掘 南から



8号焼土土坑断面 北東から



8号焼土土坑 鉄澤・刀子出土状況



8号焼土土坑完掘 北西から



9号焼土土坑断面 南東から



10号焼土土坑断面 南東から



10号焼土土坑完掘 南東から



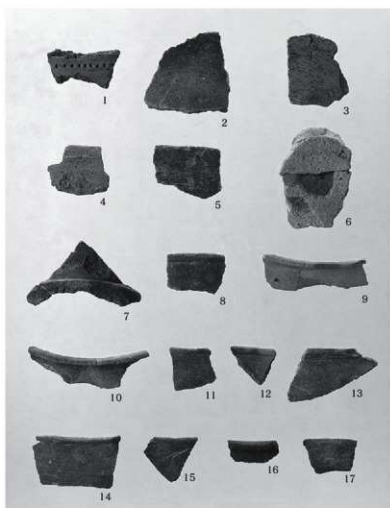
11号焼土土坑断面 東から



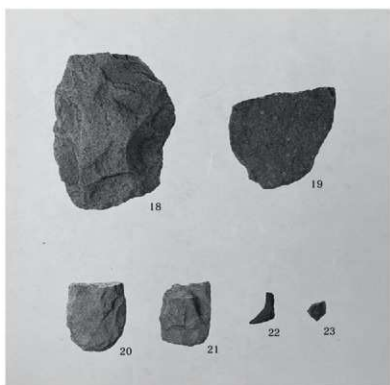
11号焼土土坑軽石出土 東から



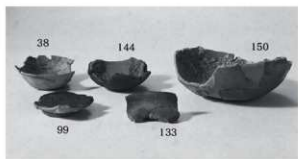
11号焼土土坑完掘 東から



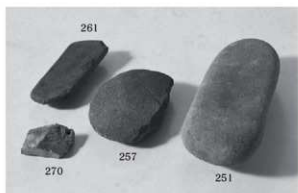
包含層 縄文土器



包含層 石斧・剥片



SB1出土遺物1 土師器



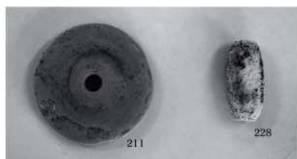
SB1出土遺物2 砥石



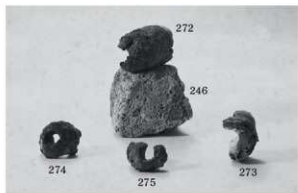
SB1出土遺物3 須恵器壺



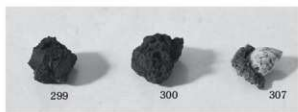
SB1出土遺物4 滑石製品



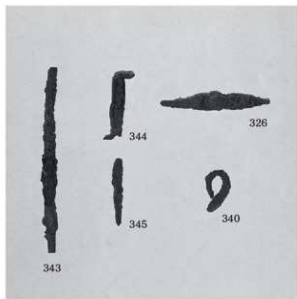
SB1出土遺物5 土製品



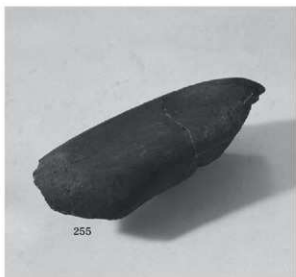
SB1出土遺物6 羽口・軽石



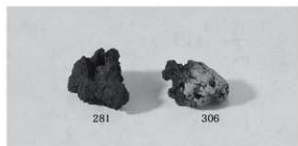
SB1出土遺物7 椀型滓・炉壁



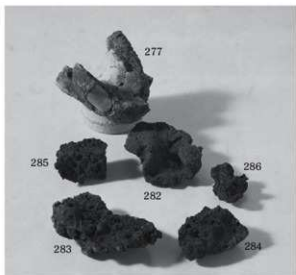
SB1出土遺物8 鉄製品



1号烧土土坑1 砥石



1号烧土土坑2 椀型滓・炉壁



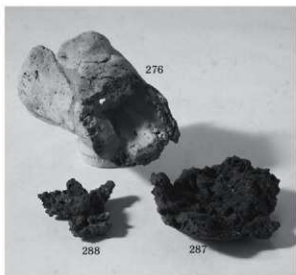
2号烧土土坑1 羽口・椀型滓



2号烧土土坑2 棒状鉄製品



3号烧土土坑1 坏



3号烧土土坑2 羽口・椀型滓



4号烧土土坑 鍋



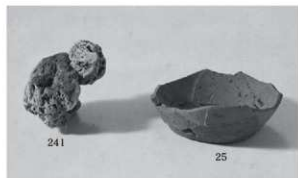
6号烧土土坑 碗型滓



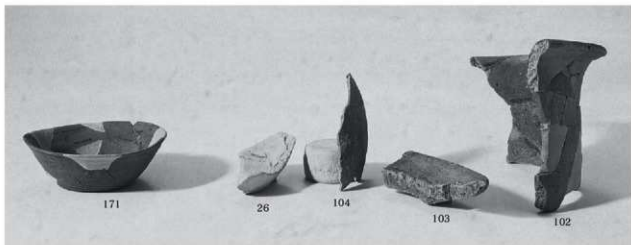
7号烧土土坑 土師器皿



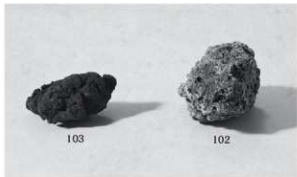
8号烧土土坑 刀子



9号烧土土坑 輕石・坏



10号烧土土坑1 坏・土師器甕



10号烧土土坑2 碗型滓・輕石

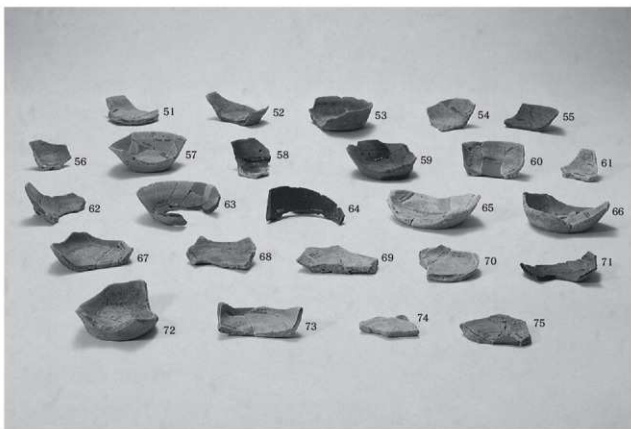


11号烧土土坑 輕石

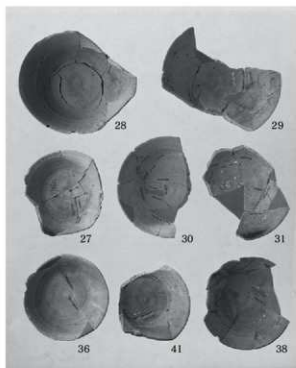




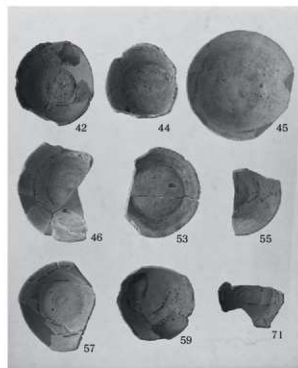
包含層1 坏



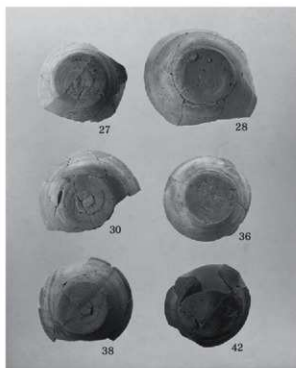
包含層2 坏



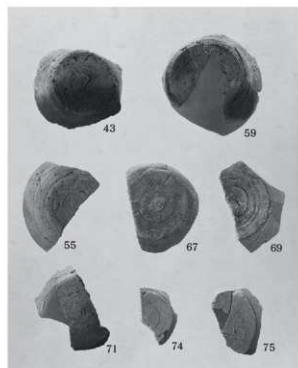
包含层3 环(内面)



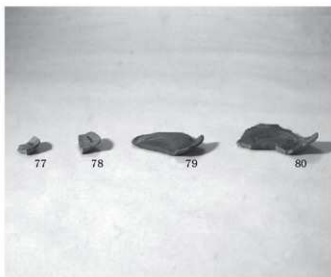
包含层4 环(内面)



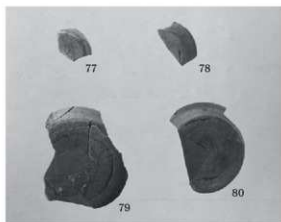
包含层5 环(外面)



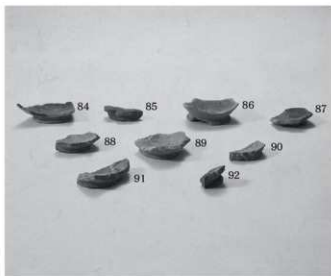
包含层6 环(外面)



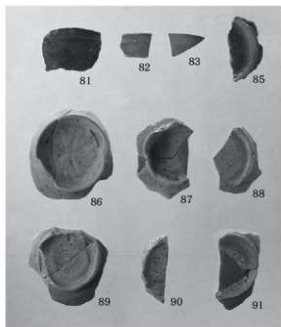
包含層7 皿



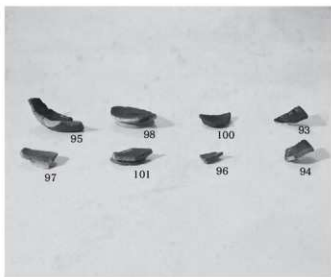
包含層8 皿外面



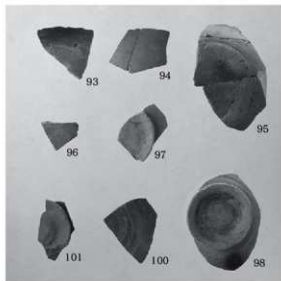
包含層9 高台付碗



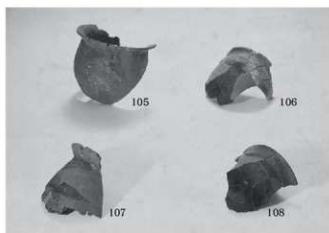
包含層10 高台付碗外面



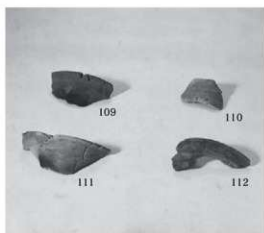
包含層11 内黒土器



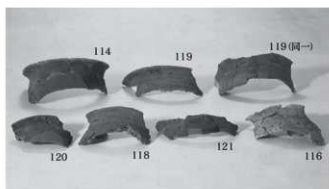
包含層12 内黒土器(外面)



包含層13 壺



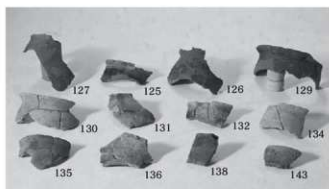
包含層14 壺



包含層15 壺



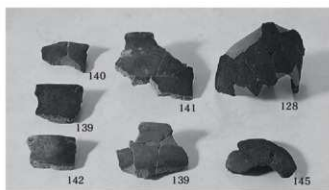
包含層16 壺



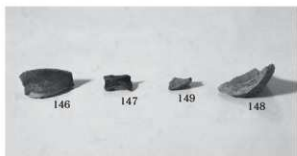
包含層17 壺



包含層18 壺



包含層19 壺



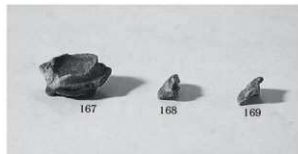
包含層20 鉢・壺



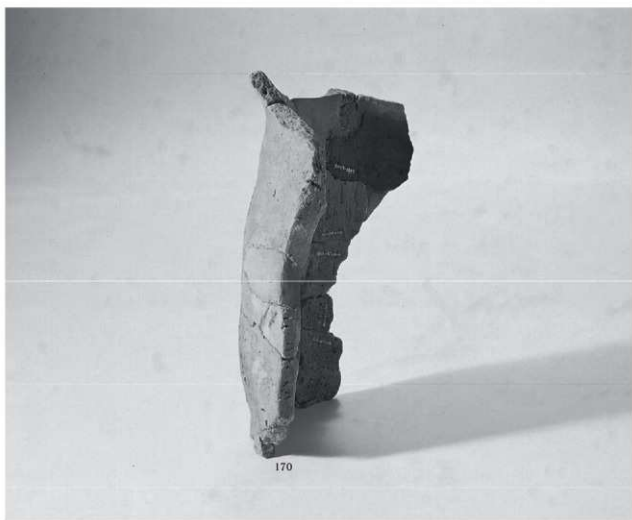
包含層21 墨書土器



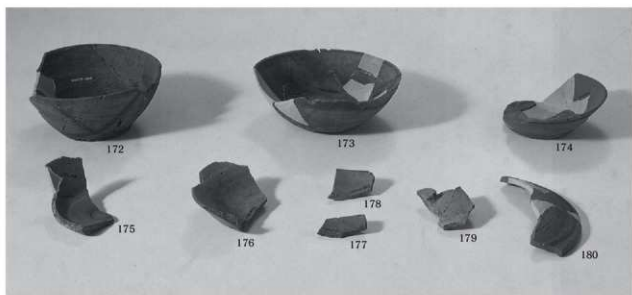
包含層22 布痕土器



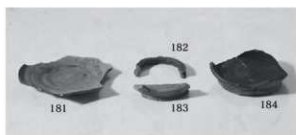
包含層23 灯明皿・合子



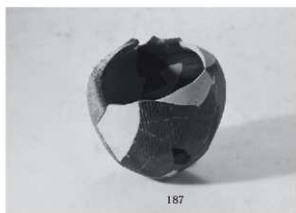
包含層24 移動式甕



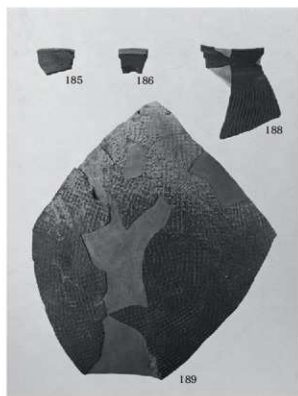
包含層25 須恵器坏



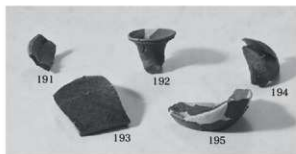
包含層26 須恵器皿・高台付碗



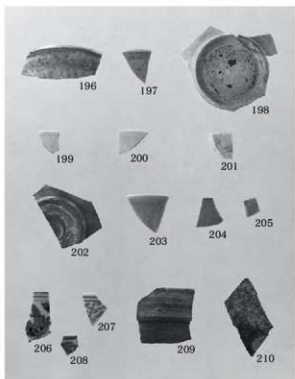
包含層27 須恵器甕



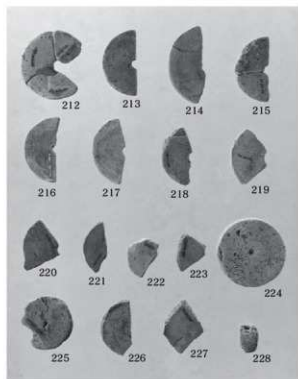
包含層28 須恵器甕



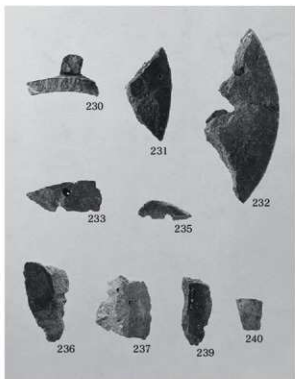
包含層29 須恵器壺



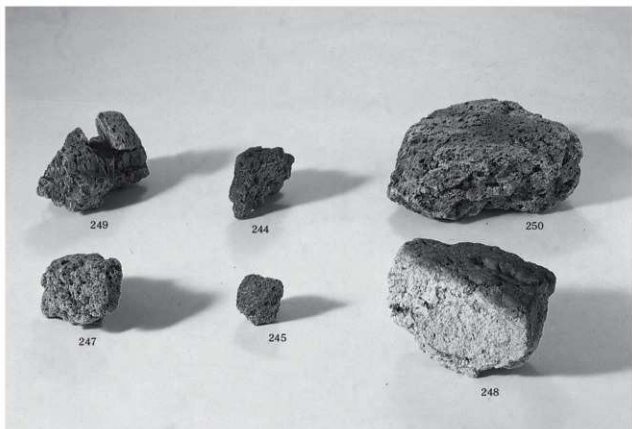
包含層30 陶磁器



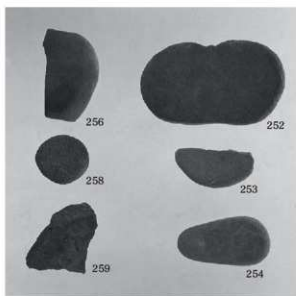
包含層31 土製品



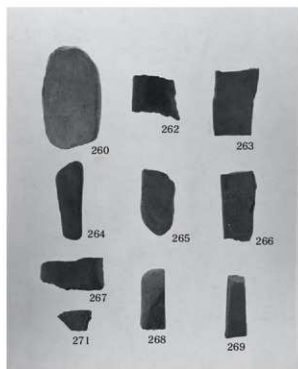
包含層32 滑石製品



包含層33 輕石製品

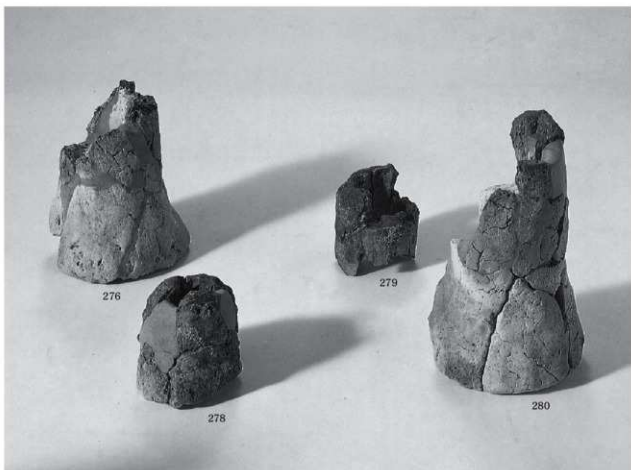


包含層34 礫石



包含層35 礫石

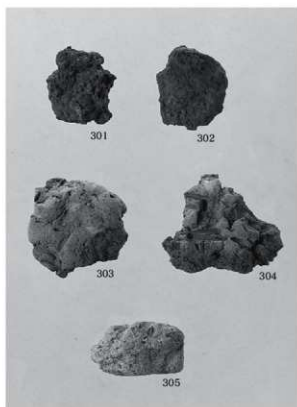




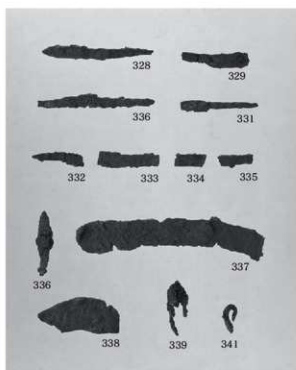
包含層36 羽口



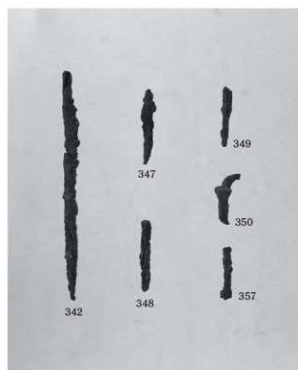
包含層37 椀型滓



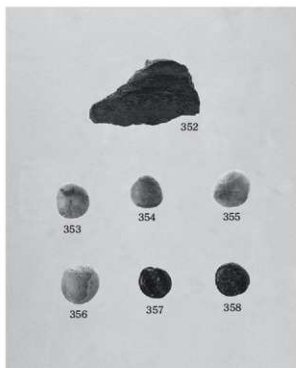
包含層38 鉄塊・炉壁・焼土



包含層39 鉄製品



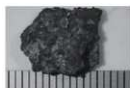
包含層40 鉄製品



包含層41 その他



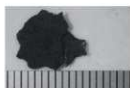
鍛造剥片308



鍛造剥片308



鍛造剥片309



鍛造剥片309



鍛造剥片310



鍛造剥片310



鍛造剥片311



鍛造剥片311



鍛造剥片312



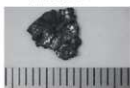
鍛造剥片312



鍛造剥片313



鍛造剥片313



鍛造剥片314



鍛造剥片314



鍛造剥片315



鍛造剥片315



鍛造剥片316



鍛造剥片316



鍛造剥片317



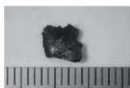
鍛造剥片317



鍛造剥片318



鍛造剥片318



鍛造剥片319



鍛造剥片319



粒状滓320



粒状滓320



粒状滓321



粒状滓321



粒状滓322



粒状滓322



粒状滓323



粒状滓323



粒状滓324



粒状滓324



粒状滓325



粒状滓325

報告書抄録

ふりがな	うめきたはりにいせき							
書名	梅北針谷遺跡							
副書名	都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第204集							
編著者名	若松宏一							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL. 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2011年 3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うめきたはりにいせき 梅北針谷遺跡	宮崎県都城市 梅北町 231番地2ほか	45202	7001	31度 41分 20秒 付近	131度 02分 50秒 付近	2008. 06. 04 ~ 2008. 09. 16	2400㎡	都城東環状線 （今町工区）地 域高規格道路整 備事業に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
梅北針谷遺跡	集落	古代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 独立柱建物住建物跡 4棟</li> <li>・ 焼土土坑 11基</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 土師器(坏・皿・碗・</li> <li>甕・壺・鍋・甕・墨書土</li> <li>器)</li> <li>・ 須恵器(坏・皿・碗・</li> <li>甕・壺)</li> <li>・ 土製品(紡錘車・土鍾)</li> <li>・ 石製品(滑石製石鍋・砥</li> <li>石)</li> <li>・ 鍛冶関係(羽口・鉄滓・</li> <li>炉壁・鍛造剥片・錠状滓)</li> <li>・ 鉄製品(刀子・鎌・鏝・</li> <li>棒状製品)</li> <li>・ 白磁(碗・皿・合子)</li> <li>・ 青磁(碗)</li> </ul>			
要約	<p>古代を中心とする遺構・遺物が出土。特に掘立柱建物跡内から検出された焼土土坑からは、大量の鉄滓や羽口など鍛冶関係の遺物が出土した。</p> <p>遺構については確認できなかったが、縄文時代後期・晩期の土器や石器が出土した。</p>							

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第204集

**梅北針谷遺跡**

都城東環状線(今町工区)地域高規格道路整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書2

2011年3月25日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660  
印刷 北一株式会社

---